

人形の頭に就いて

安 原 仙 三

今年の七月新橋演舞場へ出演の文樂は記録破りの大入をとつた。それはいろいろな意味で問題を提供する。が、今はわざとそれには觸れずに置く。併し自分をして忌憚なく言はしめるならば、自分が折角の期待は空しく裏切られたのであつた。殊にそれは人形に於いてその感が深い。

四つ橋に於ける本興行と違つて、東京も旅興行並みに五日乃至一週間で出し物が替はる。たとひ、それらが手馴れた物とはいへ、その間ろく／＼稽古もせぬのであるから、その成績の好い筈は無い。殊に人形の頭の如きも一時の間に合はせて、本格の頭を使つてゐない場合がある。例へば「志渡寺」の源太左衛門に使ふ「文七」がそれである。演舞場では文樂で一番下の文七を使つてゐたが、「文七」といふ頭は性格から

言つてそんなに敵役ではないから、源太左衛門には、もう少し強味のある文七を使はねば嫌である。流石は本年五月の本場の文樂座では恰好な文七がこの源太左衛門に充てられてゐた。これでこそ役の性格も出るので、それが演舞場の際の文七では迫力が劣つてしまふのである。

頭のついでに、「中央公論」十月號のグラフに載せられた文樂の頭に就いての三宅周太郎氏の解説に一言及びたい。先づあの中の「太十」の久吉の憎形の間の頭であるがあれでは「けんびし」（檢非違使）の性根が表はれてゐず、端役頭にしか見えぬ。これは撮影者土門氏の撮影の罪も多分にあると思ふ。それから同じ「太十」の十次郎（前半の、金襴の袴、油付前茶釜、前髪付）を三宅氏の説明に「源太」と記されてある

が、これは無論「若男」の間違ひであらう實際、源太と若男とはなか／＼區別が仕難いもので、此邊が人形頭の整理分類のむづかしいところである。

もう一つこれと反對に、「廓文章」の伊左衛門の頭を「若男」とされてゐるが、これは正に「源太」である。七百貫目の借錢を負つて勘當の身となつた藤屋伊左衛門、いかに當世代用品が流行するとはいへ、本家本元の文樂で伊左衛門に代用の頭を使ふ筈が無い。中央公論の如き堂々たる雑誌上で一般に紹介するやうな場合、その解説なり撮影なりには充分な注意や研究が望ましく、人形の頭そのものも本格的なものゝみを選択してほしいあまりに敢て燕辭をつらねた次第である。